

真宗門徒の生活

帰敬式を受けられる方へ



真宗大谷派宗務所

真宗門徒の生活

— 帰敬式を受けられる方へ —

真宗大谷派宗務所

私の覚え

法 名 釈_____

帰敬式

受式日 _____ 年 _____ 月 _____ 日

所属寺 _____ 教区 _____ 組 _____ 寺

名 前 _____ (_____ 歳)

〒

住 所 _____

_____ (☎) _____

目 次

序 章 はじめに	1
ー帰敬式を受けられる方へー	
第 1 章 帰敬式について	3
第 1 節 人生のたしかめ	3
(1) 空 過	
ー私たちは、どのような生活をしているのでしょうかー	
(2) 立脚地	
ー私たちは、何を依りどころに生きているのでしょうかー	
(3) 仏弟子	
ー法名を名告って生きる生活ー	
第 2 節 三帰依文について	8
三帰依文唱和の意味	
三帰依文	
三帰依文意識	
第 2 章 真宗門徒の生活	12
第 1 節 お内仏と私	12
(1) お内仏とは	
(2) 真宗の本尊	
(3) 本尊とは	
(4) 聞法と生活	
第 2 節 お内仏のお給仕作法	20
(1) 真宗大谷派お内仏のお荘厳	
(2) お荘厳とお給仕作法について	
(3) 朝夕の勤行について	

第3章 真宗と帰敬式	25
第1節 帰敬式の伝統	25
(1) 帰敬式のはじまり	
(2) 真宗における帰敬式	
(3) 三宝について	
(4) 法名の意義	
(5) 剃刀の意味	
第2節 真宗本廟について	28
(1) 親鸞聖人の生涯	
(2) 真宗本廟の成立	
第3節 釈尊と浄土真宗の祖師	31
(1) 浄土三部経について	
(2) 釈尊と七高僧	
資料	
・真宗宗歌	40
・恩徳讃	41
・食前・食後のことば	42

出典

20、21 頁 『真宗大谷派手帳』

23 頁 『お内仏の荘厳と作法』

24 頁 『真宗の仏事』

(すべて東本願寺出版発行)

序 章 はじめに

—帰敬式を受けられる方へ—

気がついてみれば、この私は、今ここに「生」をうけて生きています。周囲を見回すと、鳥が飛び、樹木が茂る自然の大地があり、さまざまな動物、人間が生き合っています。

しかし、私たちの社会は、自然破壊・バブル経済の崩壊・いじめなどの教育の問題などさまざまな課題をかかえ、いろいろなひずみをきたしています。つまり、「生」そのものが危機に瀕しているのが現代であるといっても過言ではありません。

このような状況の中で、私たちは、幸せになることを願って、毎日必死でがんばっています。でも、幸せを求めているはずなのに、ふと、虚しさと寂しさにさいなまれるときがあります。それはなぜなのでしょう。

私たちが願っている幸せは、どのようなものでしょうか。金持ちになりたい、健康でありたい、有名になりたいなどさまざまあるでしょう。これらの願いは、たまにかなうこともあります。しかし、かなったらかなったで、それを守るためにまたがんばらなければなりません。そして、もっともっとと欲が出て、いつまでたっても満足も安心もできません。そのうち心の中には“何のためにこんなにがんばっているのだろうか”“いつまでがんばればよいのだろうか”という問いが広がってきたり、また、自分の幸せのためにがんばればがんばるほど他人を傷つけたり、疑ったり、ないがしろにしたりして、自分は一人ぼっちになっていくこともあります。幸せを願って生きる私たちのあり方が、このように、苦しく悲しいものとなるのはなぜでしょうか。

振り返って考えてみると、人間の歴史は、まさにこのことを問い尋ねた歴史であったといってもいいのでしょう。そして、宗祖親鸞^{しゅうそしんらん}聖人は、この人生への問いを、お釈迦^{しゆか}さまが明らかにされた仏道、つまり仏^{ぶつ}・法^{ほう}・僧^{そう}の三宝^{さんぼう}に帰依する南無阿弥陀仏の教えに尋ねていかれました。私

私たちはその伝統のなかに身を受けています。

いま、この人生への問いを出発点として、南無阿弥陀仏の教えに、人間としての生き方、あり方を問い学んでいこうという、出発の式が「^{ききょう}帰敬式^{しき}」です。「^{しやく}帰敬式^{かん}」を受式しますと、「^{むな}釈^{かん}」の字を冠した二字の^{ほうみょう}法名^なをたまわります。それは、空しくない人生を生きてほしいと願っておられるはたらきに出^であ^あい^いを、ほかならないこの私の人生の上にあきらかにしていく^な名^の告^のり^のです。

ともすると、法名は「亡くなってからいただければよい」と、思われているかも知れませんが、「^{ききょう}帰敬式^{しき}」は、お釈迦さまの弟子、仏弟子になることであり、それは、南無阿弥陀仏の教えにみちびかれてわが人生を生きるということですから、生きている「今」受式することが、その本来的な意味なのです。

真宗の伝統のなかにこの身を受けた一人ひとりの、人生の新たなスタートとして、「^{ききょう}帰敬式^{しき}」をうけとめていきたいものです。

第1章 帰敬式について

第1節 人生のたしかめ

(1) 空 過

—私たちは、どのような生活をしているのでしょうか—

みずすまし
水馬しきりに円を描きける

汝 いずこより来り

いづれに旅をせんとするか

へイ 忙しおましてナ

村上志染

この詩にあるように私たちの毎日の生活は、ただ忙しい忙しいと、走りまわっているにすぎないのではないのでしょうか。こういう生活の中で私たちは、自分の思いどおりになったときには自己満足から優越感に浸ったり、また思いどおりにならなかったときには悲観して劣等感におちいったりしているのではないのでしょうか。

そこには、自分自身を省みる余裕もなく、逆にいつも不安に追い立てられている日々の連続があるだけです。人間としてのいのちをたまわりながら、その事実^{まなこ}に眼が向けられることなく、ただ過ぎていくだけの毎日です。そのように、つねに不安を足場として生きていく限り、私たちの人生はまさに、空しく過^{むな}ぎ^する（空過^{くうか}）人生にしかないのではないのでしょうか。

しかし、こうした日々の生活の中にも、「そんな生き方でよいのか」、「生^うまれた意^い義^ぎと生^いきる喜^きびにめ^いぎ^ぎめて生^よきよ」、「という、いのちそのものからの呼びかけがあります。いま、私たちには、そのいのちの根源からの呼びかけに耳をかたむけて生きる人生が願われているのです。

[教えの言葉]

- 1、身^み独^{ひと}り空^{むな}しく立^たちて復^{また}た依^よる所^{ところ}無^なし

『仏説無量寿経』 (『真宗聖典 第二版』p77)

- 2、生^{しょう}じて従^{じゅうらい}来^{ところ}する所^し、死^しして趣^{しゆこう}向^{ところ}する所^{ところ}を知らず。

『仏説無量寿経』 (『真宗聖典 第二版』p79)

- 3、本願^{ほんがん}力^{りき}にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき

功徳^{くどく}の宝海^{ほうかい}みちみちて 煩悩^{ぼんのう}の濁水^{じよくし}へだてなし

『高僧和讃』 (『真宗聖典 第二版』p590)

- 4、まことに如来^{にょらい}の御恩^{ごおん}ということをばさたなくして、われもひとも、よしあしということのをのみもうしあえり。

『歎異抄』 (『真宗聖典 第二版』p784)

- 5、ただいたずらにあかし、いたずらにくらして、老^{おい}のしらがとなりはてぬる身^みのありさまこそかなしかりけれ。

『御文』 (『真宗聖典 第二版』p983)

(2) 立脚地

— 私たちは、何を依りどころに生きているのでしょうか—

現代はある程度の社会的地位とお金があって、健康で長生きできればいいという、私たちの欲望が根底となっている時代ではないでしょうか。しかし、欲しいものが手にはいっても、なぜか生活が満たされた実感もなく、そこに虚しさを覚えていくのが現代でありましょう。

対人・対社会・対自然など、どれをとってみてもわかるように、私たちは、さまざまな条件や関係の中に生きていますが、その条件や関係がこわれたり価値観がかわると、すべてのものがかわってくることになり

ます。そういう意味では、私たちは、本来頼りとならないものを頼りとして生きているのが現実ではないでしょうか。

ごじん よ あ かなら りつきやくち
吾人の世に在るや、必ず一つの完全なる立脚地なかるべからず。
も これ よ しよ こと な あたか うきぐも うえ
若し之なくして、世に処し、事を為さむとするは、恰も浮雲の上
た ぎげい えん ごと そ てんぶく まぬが ことあた
に立ちて技芸を演ぜんとするものの如く、其の転覆を免るる事能
はざること言を待たざるなり。

清沢満之「精神主義」 (『定本清沢満之文集』p4)

このことばから私たちに問われてくるのは、私たちが何を依りどころとして生きているのかということです。空に浮かんでいる雲の上で何かをしようとしても、それはとうていできることはありません。本当に頼りにならないものを頼りとして生きていくことは、それと同じことなのではないでしょうか。この言葉は、頼りにならないものにしがみついて生きている私たちの生き方に警鐘をならしているのです。

このような私に、たまわったいのちを生きる確かな依りどころを明らかにせよというはたらきが、仏・法・僧の三宝です。三宝に出遇うことによって、空しく過ぎていく自分の人生に気づき、人生のはっきりとした依りどころ—立脚地—が明らかになるのです。

[教えの言葉]

- 1、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。

『教行信証』 (『真宗聖典 第二版』p475)

- 2、三宝に帰りまつらずは、何を以ってか枉れるを直さん。

『十七条憲法』 (『真宗聖典 第二版』p1155)

(3) 仏弟子

—法名を名告って生きる生活—

日ごろ、「生きているときは神社に、死んだらお寺に」というようなこともよく耳にしますが、これは、自分のいのちの事実が明らかになっていない人の言葉ではないでしょうか。

法名^{ほうみょう}は死んだ時につける名前だとか、お棺の中にはいるときのキップであって、生きているあいだにつけると縁起^{えんぎ}が悪いとか、あるいはまた他宗派の戒名などと混同してうけとめられているむきもよくあるようですが、私たち真宗門徒にとって、法名とは、いったいどのようなものなのでしょう。

法名は、仏の教えによって、南無阿弥陀仏^{ほんぞん}を本尊として私の人生を生きていきます、という名^な告りです。それは、私のいのちの事実を私に教えてくれるものが南無阿弥陀仏という仏^{ちえ}の智慧であることに気づき、この仏の智慧をたまわって現実を生きていきますという宣言^{せんげん}が、法名を名告り、仏弟子として生活していくということです。そこには、共^{とも}なるいのちを生きている、自分自身のいのちの尊^{とうと}さへの目覚めと、さらには、人として共に生きて在^あるといふことの発見ということがあります。

ここに、生まれた意義と生きる喜びをこの身のすべてに受けとめて私の人生を生きたる生活が開かれてくるのです。

[教えの言葉]

- 1、仏に帰依せば、終に更た其の余の諸天神に帰依せざれ。

『教行信証』(『真宗聖典 第二版』p435)

- 2、五濁増のしるしには この世の道俗ことごとく

外儀は仏教のすがたにて 内心外道を帰敬せり

『正像末和讃』(『真宗聖典 第二版』p623)

- 3、かなしきかなやこのごろの 和国の道俗みなともに

仏教の威儀をもととして 天地の鬼神を尊敬す

『正像末和讃』(『真宗聖典 第二版』p623)

第 2 節 三帰依文について

「三帰依文」唱和の意味

親鸞聖人は、お釈迦さまが明らかにされた教えは阿^あ弥^み陀^だ如^に来^よの^{らい}本^{ほん}願^{がん}、南無阿弥陀仏の法であると私たちに教えてくださっています。その意味で、三宝はそれぞれ、「法」は南無阿弥陀仏、「仏」はその南無阿弥陀仏の法のはたらきに目覚めた人、「僧」はその南無阿弥陀仏の教えを抛りどころとして集う人びととうけとめることができます。したがって、三宝への帰依はそのまま南無阿弥陀仏への帰依をあらわします。

帰敬式においても、いま、私もこの南無阿弥陀仏の教えを聞いて生きるものとなりますという自らの名^な告^のりとして「三帰依文」を唱和します。

「三帰依文」は、明治時代にいろいろなお経^{きょう}の文から、その意味をとって整理され作られたものとつたえられていますが、仏教各宗派一般でもつかわれ、真宗大谷派でもこれをもちてきました。

三 帰 依 文

人身^{にんじん}受け難^{がた}し、いますでに受^うく。仏法^{ぶつぽう}聞^{がた}き難^{がた}し、いますでに聞^きく。
この身^み今生^{こんじょう}において度^どせずんば、さらにいづれの生^{しょう}においてかこの
身^みを度^とせん。大衆^{だいしゅう}もろともに、至心^{ししん}に三宝^{さんぼう}に帰依^{きえ}し奉^{たてまつ}るべし。

自ら仏^{みずか}に帰依^{きえ}したてまつる。まさに願^{ねが}わくは衆生^{しゅじょう}とともに、
大道^{だいどう}を体解^{たいげ}して、無上^{むじょう}意^いを發^{おこ}さん。

自ら法^{みずか}に帰依^{きえ}したてまつる。まさに願^{ねが}わくは衆生^{しゅじょう}とともに、
深く経藏^{きょうざう}に入りて、智慧^{ちえうみ}海^{かい}のごとくならん。

自ら僧^{みずか}に帰依^{きえ}したてまつる。まさに願^{ねが}わくは衆生^{しゅじょう}とともに、
大衆^{だいしゅう}を統理^{いつざい}して、一切^{いっさい}無碍^{むがい}ならん。

無上^{むじょう}甚深微妙^{じんじんみみょう}の法^{ぽう}は、百千万劫^{ひゃくせんまんごう}にも遭遇^{あいあ}うこと難^{かた}し。我^{われ}いま見聞^{けんもん}し
受持^{じゆじ}することを得^えたり。願^{ねが}わくは如来^{にょらい}の真実義^{しんじつぎ}を解^げしたてまつらん。

三 帰 依 文 意 訳

この世に人として身^みを受けることは、私の思いをはるかにこえたことであるにもかかわらず、私は今^{いま}すでにここにこの身を受けておりました。出^で遇^あい難^{がた}い仏法に、はからずも今、私は出遇^でうことができました。

ここに生きている私が、今、救^{すく}われなければ、いったいいつになつたら救われるというのでありましようか。だからこそ、今、あらゆる人々と共^{とも}に私の全てを^づ尽くして心から仏・法・僧の三宝^{さんぼう}を尊^{とうと}び、それを依りどころとして生きていきたいと願わずにはいられません。

私は、仏(ブツダ)を尊^{とうと}び、それを依りどころとして生きていきます。それは、あらゆる人々と共に、真実の法を明らかにされた正しい仏の道をこの身にうなずき、人間^{じんぎょうじゆ}を成就する大いなる心がおこることを願うからにほかなりません。

私は、法(ダルマ)に目覚めて、それを依りどころとして生きていきます。それは、あらゆる人々と共に、真実^{しんじつ}の教えを深く求め、あたかも海のように深く限りない智慧^{ちゑ}をいただくことを願うからにほかなりません。

私は、僧(サンガ)を敬^{うやま}い、それを依りどころとして生きていきます。それは、あらゆる人々と共に、仏法によって生きる平等で自由^{つど}な集^{つど}い(世界)が開かれることを願うからにほかなりません。

この上もなく奥深く尊い真実の法は、どれだけ長い時間をかけても出遇うことは大変むずかしいものです。そうであるのに、私は今、その真実の法に出遇うことができ、その真実の法を依りどころとして生きる身となることができました。ここに、聞法の生活をとおして、本当にこの身に生きてはたらく阿弥陀如来の真実を、私のいのちの中に明らかにしていきたいと願っています。

第2章 真宗門徒の生活

第1節 お内仏と私

(1) お内仏とは

私たち真宗門徒の家では、仏壇を「お内仏^{ないぶつ}」といただいてきました。毎朝お仏供^{ぶつぐ}をお備えし、お明^あかりを点^{とも}して、「正信偈^{つと}」のお勤めをする^{つと}ことを、真宗門徒としての生活の中心としてきた伝統があります。

それにもかかわらず、私たちは現在、仏さまとあまり関係のない生活をしているのではないのでしょうか。よく「私の家は新家でまだ亡くなった人がいないのでお仏壇はありません」ということを耳にしますが、このようなところに現在の私たちと「お内仏」とのかかわりが象徴されています。例えば、亡くなった人がいないのに、お仏壇を求めてはいけな^いとか、縁起が悪いとか、またお仏壇を開いても、そこには先祖の位牌や写真、そして亡くなった方が生前よく好んだ物が供えてあって、ときには、そのお供えで^{ほんぞん}ご本尊が見えなくなっていたりすることもあります。また、最近^{おふだ}は、いろんな神社の御札やお守り、それに薬師如来や大日如來の像があつたりすることさえあります。

私たちは、先人から「お内仏」として教えられ、伝統されてきた、その「お内仏」を、先祖をまつる先祖壇にしたり、自分の欲求の満足を祈る依頼壇にしているのではないのでしょうか。

私たちのお内仏の中央には、ご本尊として阿弥陀如来の御絵像^{ごえぞう}が掛けられています。それは、私は阿弥陀如来を本尊として生きるということを表しています。自己中心的で除災招福のみを願って生きている私たちに、阿弥陀如来は、いただきたいのちの尊さにめぎめ、身の事実をひきうけて生きてほしいと、私たちに願いかけておられます。

ご本尊をとおして阿弥陀如来の本願を聞きあて、私たちの本当のあり方に出遇っていくその場を、「お内仏」としていただいていくことを、私

たちの先人は教えてくださったのではないのでしょうか。

その意味で、私たちの先祖は、私を阿弥陀如来の本願の教えのまゑに身をすえさせてくれた先達として「諸仏」と仰がれるのです。つまり、私たちをお内仏の前に身をすえさせて、人間としていのちをたまわったものの最も大切なことを私たちに教えてくださるのです。そこに諸仏としてのはたらきがあります。

(2) 真宗の本尊

私たち真宗門徒のお内仏の中央には、「本尊」として、「方便法身尊形」と裏書きされた阿弥陀如来の御絵像をおかけしています。それは、「いろもなし、かたちもましまさ」ない法身、つまり南無阿弥陀仏が、私たち人間にわかるような具体的な相としてあらわれた形です。私たちにわかる形とまでなるところに、南無阿弥陀仏という法の具体的なはたらき(方便)があります。

すなわち「きみょうじんじつぽうわげこうによらい帰命尽十方無碍光如来」(浄土論)をもって真宗の御本尊とあがめましましき。

『改邪鈔』(『真宗聖典 第二版』p827)

と、真宗のご本尊は帰命尽十方無碍光如来とも示されますが、この帰命尽十方無碍光如来は、天親菩薩の南無阿弥陀仏のうけとめです。

では、この南無阿弥陀仏とはどのような仏さまなのでしょう。一言でいうならば、この私たちに、誰にも代わってもらわない必要のない「一人」として尊いいのちをたまわって生きている事実に目覚め、空しくない人生を生きよ、と願いかけている仏さまともいえましょう。私たち真宗門徒は、その南無阿弥陀仏を本尊とし、きえらいはい帰依・礼拝して生活するのです。

親鸞聖人は、南無阿弥陀仏を本尊とする生活のうちに、

弥陀みだの五劫思惟ごこうしゆいの願がんをよくよく案あんずれば、ひとえに親鸞しんらん一人が
ためなりけり。されば、そくばくごうの業ごうをもちける身みにてありけるを、
たすけんとおぼしめしたちける本願ほんがんのかたじけなさよ

『歎異抄』 (『真宗聖典 第二版』p783)

と、自らの身の事実をうなずかれました。私たちは、南無阿弥陀仏の本尊の前に身をすえ、如来の本願の教えを聞くことにおいてはじめて、本尊を見失い、如来の願いにそむきつづけている私自身の姿が明らかになります。そういう如来の本願を依りどころとして生きる生活こそ、「お内仏」のご本尊を中心にした真宗門徒の生活でありましょう。

(3) 本尊とは

よく“あなたのご本尊は”とたずねると、“仏壇の中にある”とか、“もう古くなって”という返事がかえってくることがあります。

このようなことばに代表されるように、私たちは、ともすると「本尊」を、阿弥陀如来の御絵像ごえぞうの掛け軸そのものにとらえがちです。ですから、古くて煤すすけていたりとか、小さいとか大きいとか、あるいは、御絵像であるとか、木仏である、ということがでてくるのでしょうか。つまり、私たちは「本尊」を「もの」としてとらえていってしまうのです。

蓮れん如にょ上しょう人にんに、

他流たいうには、「名号みょうごうよりは絵像えぞう、絵像えぞうよりは木像もくごう」と、云うなり。

当流とういうには、「木像もくごうよりはえぞう、絵像えぞうよりは名号みょうごう」と、いうなり。

『蓮如上人御一代記聞書』 (『真宗聖典 第二版』p1040)

というお言葉があります。これは、まさに、本尊を絵像であるとか、木像であるとかと、その形や材料にとらわれて、本来の「本尊」ということが見失われていることを指摘し、本尊は、「もの」ではなく、南無阿

弥陀仏という名号であると、教えられたお言葉です。

「本尊とは何か、本当に尊い事である。物ではなくて尊い事である」

『本尊』（p68・東本願寺出版部刊）

この言葉をとおしてみる時、私たちは日ごろの生活の中でいったい何を“尊い”と感じているのか、あらためてその中身をはっきりさせてみなければならぬのではないのでしょうか。そこには、意識するとしないとにかかわらず、“私にとっての”都合のよさ、“私の”価値判断というような“私の思い”があることを否定できません。実はこの“私の思い”というものが私たちにはっきりしていないところに、私たちがいつの間にか「本当に尊いこと」を“私にとっての尊いもの”に置き換えていくということも起きてきます。生きとし生きるものの“いのち”そのものをも、自分に都合よく役立てる「もの」としていつて、何の痛みも感じないで平然としていられるという、現代社会の問題も、実はそこにあるのではないのでしょうか。

「本当に尊いこと」としての「本尊」に私たちが出遇う、それは限りなく“私の思い”によって生きている私たちの在り方が明らかにされるということです。「本尊」とは、私たちに、まさに“本当に尊いこと、あなたの本当に尊い事実を明らかにせよ”と教え示す「はたらき」なのです。

（４）聞法と生活

お念仏を申す生活とは南無阿弥陀仏を本尊として生きる身となったということです。ですから、お内仏で朝夕お勤めつとをすることは、南無阿弥陀仏という如来の教えをわが身に聞いていくことであり、本願でに出遇っていくことです。「正信偈・和讃」のお勤めをすることは、それをとおして宗

祖親鸞聖人が出遇われた南無阿弥陀仏の教えに私たちが出遇い、その宗祖のよろこびを私たち自身のよろこびにしていくことであります。そして、また、お聖教しょうぎょうを読んでいくことは、その南無阿弥陀仏の教えを説かれたお釈迦さまや先達の教えを聞いていくことです。このことに立った時、私の生活は、朝夕のわが家のお内仏でのお勤め、そしてお寺へ、さらには真宗本廟しんしゅうほんびょうへと、宗祖の恩徳おんどくを偲おもぶ聞法もんぽうの座ざにおのずと身をはこびすすめることとなるのでしょうか。

このような聞法の生活をとおして私たち一人ひとりに願われているのは、宗祖が、

邪見・橋慢きょうまん悪衆生 『教行信証』 (『真宗聖典 第二版』p228)

さるべき業縁ごうえんのもよおせば、いかなるふるまいもすべし

『歎異抄』 (『真宗聖典 第二版』p776)

とうなずかれたように、罪惡深重の身でありながら、尊いいのちをたまわって生まれてきた、その事実気づいていくことです。

ともすると、私たちはいのちを自分のものにして他のいのちを傷つけ、その尊さをもふみにじっているのではないのでしょうか。たとえば、私たちが毎日いただく食事をみてもわかるように、米粒や、野菜や肉、それに魚、これらはみなこの大地だいちに私たちと共にいのちをうけたものです。私たちのいのちは、あらゆるいのちの尊さの上に成り立っているものなのです。しかし、そのことをあたりまえにして、その事実頭にさがりません。

たなの上で

ネギが

大根が

人参が

じぶんの
出を待つように
ならんでいる
こんな
おろかなわたしのために

木村無相

(『念仏詩抄』p52)

という念仏に生きた人の詩があります。“味が悪い、格好が悪い”と不平をいって生きている私たちに、この詩にあらわされるような、いのちの尊さを拝む生活が開かれるのは、どこまでも南無阿弥陀仏に出遇うところにあります。

私たちは、たくさんのいのちをいただいて生きていることを忘れてはなりません。そして、いろいろなたくさんのいのちのはたらきのなかで、いま、私をたまわっている事実が目覚めなければなりません。そこに「共なるひとつのいのち」を生きている、わがいのちとの新しい出遇い、発見があります。あなたの“自身のいのちの事実が目覚めよ”とよびかけるはたらきが南無阿弥陀仏です。ご本尊を中心とした聞法生活の中で、食事をいただく時に「^{しょくぜんしょくご}食前食後のことば」を唱和したり、南無阿弥陀仏と^{ひとこえ}一声のお念仏を^{とな}称えていくことのたいせつな意味は、こういうところにあるのではないのでしょうか。

しかし、私たちは、生活の中でなかなか“いのちの事実”に出遇うことは容易ではありません。それはいったいどういうことによるのでしょうか。

そこには、私たちがどこまでも自分をたて、自らを^よ善しとし、自分中心の生き方をしているということがあるのではないのでしょうか。不平・

不満・不安の毎日をおくっているのは、その証拠ではないでしょうか。

私たちの生きている現実^に目を向ける時、そこには自己中心的な生き方によって、さまざまな神をつくりだし、満足と安定とを願いかけている姿があります。たとえば飛行機事故があいつぐと、飛行機事故にあわないための神ができたり、受験戦争といわれる時代には合格祈願の神さまができたり、人間の欲望の数だけ神があるとよく言われるのは私たちの自己中心的な生き方そのものを示していることなのです。

財貨を依頼めば、財貨の為に苦しめらる。

人物を依頼めば、人物の為に苦しめらる。

我身を依頼めば、我身の為に苦しめらる。

神仏を依頼めば、神仏の為に苦しめらる。

清沢満之「有限無限録」(『定本清沢満之文集』p381)

という言葉がありますが、ただ自分の欲望追求のみにここをうばわれると、逆にその頼んだものにかえって苦しめられるということがあるのではないのでしょうか。つまり、神を頼めば、その神を恐れ、神にふりまわされる人生になるのでしょうか。

念仏者は無碍の一道なり 『歎異抄』(『真宗聖典 第二版』p770)

と、南無阿弥陀仏の教えに出遇ったものは、わが身の「いのち」の事実^ににたち、あらゆることを自身のうえにしっかりと受けとめて生きていける道がひらかれることを親鸞聖人は、はっきりとお教えくださっています。

仏に帰依せば、終にまたその余の諸天神に帰依せざれ

『教行信証』(『真宗聖典 第二版』p435)

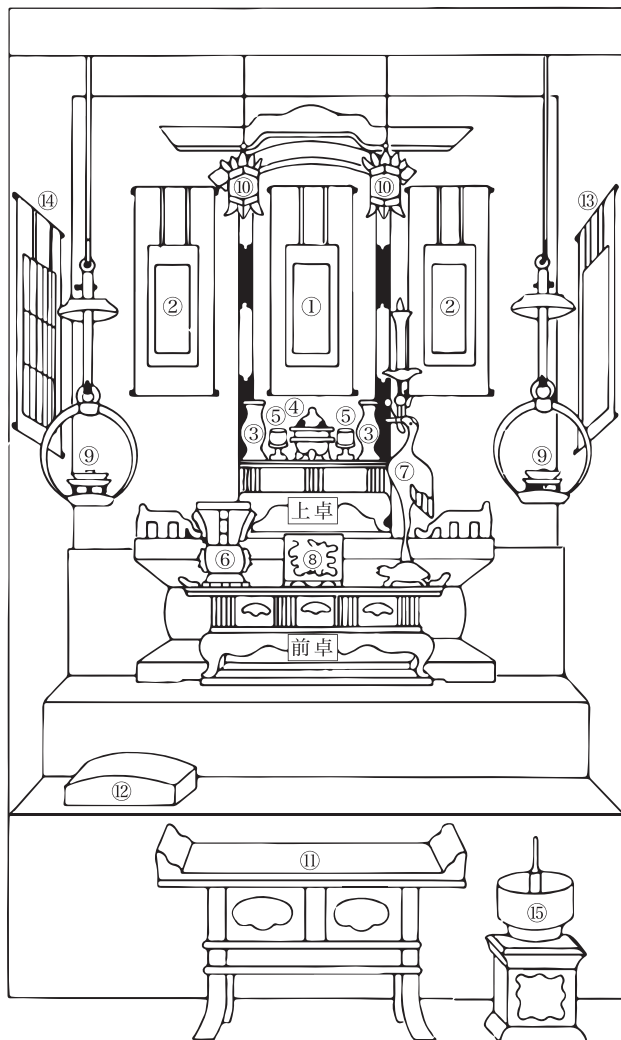
とあるように、日のよしあしを占ったりする必要のまったくない生活、何事にも怖れず、左右されることなく、人として私の人生を尽くしてい

ける生活がそこにひらかれるのです。

帰敬式を受け、南無阿弥陀仏の本尊のまえに身をすえることが、真宗門徒としての「しるし」であるというところには、このようなことが願われているのではないのでしょうか。如来の本願の教えにわが身の姿が問われ、いのちの事実が目覚めていく、そこに「お内仏」を中心とする真宗門徒としての生活があるのでありましょう。

第2節 お内仏のお給仕作法

(1) 真宗大谷派お内仏のお荘厳



上記の番号は21頁の仏具の番号を示しています。

仏具の名称

- ① 御 本 尊 ご ほん ぞん 阿弥陀如来の絵像または木像を安置します。
- ② お 脇 掛 お わき かけ 向かって右側に帰命尽十方無碍光如来(十字名号)、左側に南無不可思議光如来(九字名号)、もしくは向かって右側に宗祖親鸞聖人、左側に蓮如上人の御影をお掛けします。

上 卓 うわ じょく

- ③ 華 瓶 け びょう 水を備える器。密などの青葉のものをさします。
- ④ 火 舎 香 炉 か しゃ かう ろ 焼香をするための金香炉の一つ。上卓の中央に置きます。
- ⑤ お仏供(お仏飯) おぶつく ぶつ ぼん 火舎香炉を中心に一对備えます。

前 卓 まえ じょく

- ⑥ 花 瓶 か ひん 八藤紋が内側に、牡丹紋が外側にくるように置きます。
- ⑦ 燭台(鶴亀) しょくたい つるかめ 平常時は、木蠟(朱色の木製のろうそく)を立てます。
- ⑧ 土 香 炉 ど かう ろ 火舎香炉を中心に一对備えます。
- 陶製の香炉でおつとめの前の燃香に用います。
- ※線香は適当な長さに折り、火をつけたほうを左にし、灰の
上に横にして焚きます。

その他の仏具と必要なもの

- ⑨ 輪 灯 りん とう おつとめの時に輪灯一对に灯明を点じます。
- ⑩ 金 灯 籠 きん とう ろう 御本尊の前に一对さげる灯籠。
- ⑪ 和讃卓(経机) わさんじょく お内仏の前に置く卓。和讃箱、経本、勤行本をのせます。
- ⑫ 御 文 箱 お ふみ ばこ 蓮如上人の『御文』を納める箱。
- ⑬ 法 名 軸 ほう みょう じく 亡くなられた方の法名を記すための掛軸。
- ⑭ 合幅の法名軸 ごう ぷく の ほう みょう じく 複数の法名を記すための掛軸。
- ⑮ 鈴、鈴台、鈴撥 りん りんだい りんぼち おつとめの際に打ちます。使用しない時は、撥を鈴のなかに納めておきます。

詳しくは、『真宗の仏事』(東本願寺出版発行)をご覧ください。

(2) お荘厳とお給仕作法について

	平 常	命 日 (月忌)	祥 月 命 日	年 忌 法 要	修 正 会 (正月)	春・秋 彼岸 会	孟 蘭 盆 会	報 恩 講	御 移 徙	(おわたまし)
五 具 足								○		
璽 珞								○		
三 具 足	○	○	○		○					
打 敷			○ ※1		○				○	
華 束 (杉 盛)			○		○ ※2				○	
朱 蠟 ※3		○	○		○				○	
焼 香		○	○		○				○	
木 蠟	○									
燃 香	○	○	○		○				○	

※1 — 中陰中は、中陰用の打敷。百ヵ日の法要からは平常の打敷に戻します。

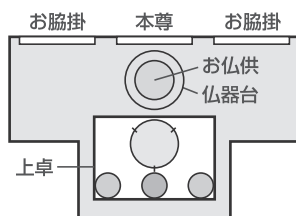
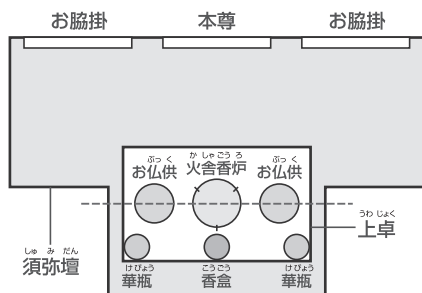
※2 — 修正会は折敷に鏡餅を備えます。折敷のないときは供箇に備えます。

※3 — 中陰中は銀(白)の蠟燭です。命日、祥月命日、修正会は白い蠟燭でも構いません。

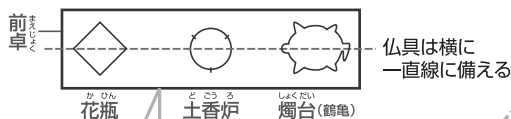
各仏供の備え方（平常）

お仏供について

- 平常は毎朝おつとめの後にお備えし、お昼にお下げします。
- 上卓に一对備えるのが基本(下図 左)ですが、置けない場合はご本尊の前に仏器台を置いて備えます(下図 右)。
※お脇掛が御影(親鸞聖人・蓮如上人)のときは、お脇掛の正面にも備えます。



上卓にお仏供がのらない場合は、
本尊の正面に仏器台を置いて備えます。



- ◎蓮の実が正面
- ◎蓮の葉が外側
- ◎蓮の苔が内側

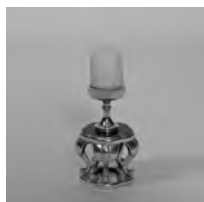


※花瓶に紋がついている場合は、八藤紋が内側(土香炉側)に、
牡丹紋が外側になるように置く。



火舎香炉

焼香するための金香炉の一つで上卓の中央に置きます。焼香は、平常のおつとめには行わず、命日(月忌)や祥月命日、年忌法要などの際に行います。三本足の一本が手前にくるように置きます。



お仏供

お仏供は、盛槽で形をととのえた白飯を仏器にのせ火舎香炉を中心に一对備えます。上卓に置くことができない場合は、本尊の前に仏器台(写真左)を置いて備えます。



供筥

お華束(小餅)を盛るための仏具です。上卓の両側、須弥壇の前よりに備えます。

(3) 朝夕の勤行について

お内仏のまえに身をすえて勤行することは、自分が南無阿弥陀仏の教えを聞き、如来の願いに出遇っていくということです。決して、先祖の冥福を祈ったりすることではありません。したがって、正しいお荘厳をし、服装を整え、略肩衣をかけ、お念珠をもって身を正してお勤めをしましょう。



平常の勤行(おつとめ)次第例

正信偈(草四句目下)	三頁
念仏讃(洵三)	三三頁
和讃	
回向(願以此功德)	四九頁
御文	六〇頁

(※頁数は『真宗大谷派勤行集』の頁です)

または、正信偈(草四句目下)、同朋奉讃(九七頁)をおつとめし、御文(六〇頁)を拝読します。

第3章 真宗と帰敬式

第1節 帰敬式の伝統

(1) 帰敬式のはじまり

帰敬式は、お釈迦さまが在家信者の耶輸陀の両親と妻とに、仏・法・僧の三宝に帰依する「三帰」をさづけ、優婆塞（男性の在家の仏弟子）・優婆夷（女性の在家の仏弟子）となったというところに、そのはじまりをもとめることができます。このことは、『本行集経』巻35に説かれています。

このお経によれば、お釈迦さまのまだ生きておられた時からすでに在家の信者が、仏・法・僧の三宝に帰依し仏弟子となっていくということがあり、そして、インド・中国・日本とそれが伝統されてきたと考えられます。したがって、帰敬式は、まず仏・法・僧の三宝に帰依することにあります。

(2) 真宗における帰敬式

私たちの宗祖、親鸞聖人は9歳のとき、青蓮院の慈鎮和尚のもとで、髪をおろして出家得度されたといわれていますが、聖人自らが三宝に帰依して生きる身と決定されたのは、阿弥陀如来の本願への目覚めをとおしてです。それは、親鸞聖人29歳、「よきひと」法然上人との出遇いときであり、その回心を、「建仁辛の西の暦、雑行を棄てて本願に帰す」（『教行信証』『真宗聖典 第二版』p474）と語られています。

それ以来、親鸞聖人の教えをうけたお弟子をはじめ、おおくの私たちの先達もその本願の教えに出遇い、三宝に帰依して生きられました。それが「おかみそり」といわれてつたえられてきました。この「おかみそり」の名前は、1876（明治9）年に、「帰敬式」と改められましたが（真宗

四派の『宗規綱領』)、そこには阿弥陀如来の本願の教えに聞くことを生涯の課題として選びとり、生きるという同じ願いが伝えられています。

(3) 三宝について

いまからおおよそ2500年前、お釈迦さま(仏陀)^{ぶつだ}は人生の真実を求め、ついに南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ}の法に出遇われました。「苦」なる人生の実相を極められたお釈迦さまは、私たち一人ひとりが、かけがえのない尊いいのちをたまわって生きている事実が目覚められました。そして、お釈迦さまは、その南無阿弥陀仏の法により、人間として生まれた意義と生きる喜びに目覚めることこそが私たちの幸せであると教えられています。

このお釈迦さまがさとられた南無阿弥陀仏の法が、現実の世界に具体的に はたらく姿が仏法僧の三宝です。

「仏」とは、苦しみになやむ人間を救おうとする南無阿弥陀仏の法に目覚めた「人」(お釈迦さま・諸仏^{しよぶつ})であり、また、南無阿弥陀仏という「ことば」にまでなったのが「法」であり、「僧」とは、南無阿弥陀仏によって結ばれたひとびとの「あつまり」です。

私たちにとって、この三つこそが人生の真実の宝であるという意味で「三宝」といいます。

(4) 法名の意義

私たちは、日ごろ、両親からの願いがかけられた名前で生活しています。しかし、帰敬式をうけると、「釈」の字が冠せられた二字の法名をたまわります。「釈」は、お釈迦さま、あるいは諸仏の弟子となった仏弟子としての名告りです。それは、南無阿弥陀仏の法を明らかにされたお釈迦さまの教えを聞いて生きるものとなるという名告りです。

(5) 剃刀の意味

帰敬式には、髪をおろすことをかたどった「剃刀の儀」があります。「おかみそり」ともいいならわされてきたのも、そのことによります。その髪をおろすことの由来は、お釈迦さまの八相成道のことが説かれた、
珍妙の衣を捨てて法服を着る。鬚髪を剃除したまい、樹下に端坐し
勤苦したまうこと六年なり。『仏説無量寿経』（『真宗聖典 第二版』p3）

という『仏説無量寿経』の文にもとめることができます。

また、法然上人のお言葉として、仏の教えを聞く者は、「勝他(他人に自分を誇る)」「利養(自分だけのことをはからう)」「名聞(自分をよくみせかけようとする)」という「みつのもとどり」を「そりすてよ」とおっしゃったとつたえられますように(『口伝鈔』『真宗聖典 第二版』p806)、“髪をおろす”、というところに私たちの自力の心をはなれるという意味をうかがうことができます。私の思いを中心にした生活が迷いであることに気がつき、仏さまの教えを依りどころとして生きるものとなることへの質的転換の象徴的なかたちとして「剃刀の儀」があります。



帰敬式での「剃刀の儀」

第2節 しんしゅうほんびょう 真宗本廟について

(1) 親鸞聖人の生涯

親鸞聖人は、1173 (承安^{じょうあん}3) 年、京都・宇治にほど近い日野^{ひのありの}の地に日野有範^{ひのありの}の長男として誕生されました。9歳のときに、青蓮院^{しょうれんいん}で出家得度され、範宴^{はんねん}と名告られました。その後、人生においてもっとも多感な少・青年時代を比叡山^{しやうじ}で懸命に学ばれました。それは、どこに生死の迷いをはなれる道があるのかという問いをかかえてのものでした。

1201 (建仁元^{けんんにんがん}) 年、29歳のとき、聖人は比叡山での学びのなかで見いだせなかった救いを求めて六角堂^{ろっかくどう}に100日の参籠^{さんろう}をされ、その95日目の暁、救世観世音菩薩^{あかつきくぜかんぜおんぼくす}の夢告^{むこく}をうけられ、吉水^{よしみず}の法然上人^{ほうねんしょうにん}を訪ねる決意をされました。法然上人に出遇われた聖人が聞きとられたのは、

ただ念仏^{ねんぶつ}して、弥陀^{みだ}にたすけられまいらすべし

『歎異抄』 (『真宗聖典 第二版』p768)

との一言の「おおせ」ででした。そのよろこびを

建仁^{けんんにん}辛^{かの}の西^{とり}の暦^{れき}、雑行^{ぞうぎよう}を棄^すてて本願^{ほんがん}に帰^きす。

『教行信証』 (『真宗聖典 第二版』p474)

と書きとどめておられます。

1207 (承元元^{じょうげんがん}) 年、奈良興福寺の訴えなどにより朝廷は、法然上人の説かれる念仏の教えのもとに集っていた人びとを弾圧しました。これによって法然上人が土佐の国 (高知) へ流罪^{るざい}とされたのをはじめ、主だった門弟が死罪・流罪とされました。その時親鸞聖人は越後^{えちご}の国 (新潟県) へ流罪となりました。聖人35歳のときです。

流罪の地・越後で聖人が出遇われたものは、荒涼^{こうりよう}とした自然であり、富や権力などとはまったく無縁に、人間としてのいのちを赤裸々^{せきらら}に生きている人びとの姿でした。聖人は越後で、妻 恵信尼^{えしんに}、そしてお子さま

ちと生活されました。文字通り肉食妻帯にくじきさいたいの一生活者となって生きていかれたのです。そのなかで聖人は、法然上人のお言葉がいよいよ確かなものとなって心にひびきわたるのを感じ、「愚禿釋親鸞ぐとくしゃくしんらん」と名告られました。

越後に流されて5年後、罪が赦ゆるされた聖人は、京都にはもどられず、1214(建保2)年、42歳のとき、常陸ひたちの国(茨城県)へ移られました。その後、およそ20年のあいだ関東にとどまれ、本願念仏の教えを縁あるひとびとにつたえられました。

60歳をこえたころ、聖人は関東の同朋どうぼうたちとわかれて京都に帰られました。そして、関東においてすでに書きすすめられていた『教行信証』を完成され、その後の生活をもっぱら著作にささげられました。

1262(弘長2)年11月28日、聖人はその生涯を仏道にささげつくして、90年の生涯を閉じられたのです。

(2) 真宗本廟の成り立ち

親鸞聖人が亡くなられて10年後の1272(文永9)年、聖人の末娘である覚信尼かくしんには、門弟のかたがたの協力をえて、東山大谷おおたにの地に聖人の廟堂びやうどうを建てられました。そして聖人の教えを聞き、聖人の御真影の前に身をすえて、聖人が明らかにされた念仏ごんげんざいせっぽうの教えを今現在説法の教えとして聞いていかれたのです。

その後、現在にいたるまで、700年以上にわたる長い年月のなかで多くの先達が念仏の教えに出遇われ、同じように真宗本廟しんしゅうほんびやうにおいて、聖人の御真影のまえにすわって、わが身をみつめ、求道の歩みをすすめられました。

その方々の歓喜かんぎと謝念しゃねんによって現在まで崇敬護持そうきようごじされてきたのが真宗本廟です。そのながれのなかに身をうけた私たちは、先達によって伝統

されてきたその願いをこの身にうけとめ、真宗本廟に身をはこび、今現在説法される聖人の御真影を通して、わが身のうえに聖人の教えを確かめていきたいものです。



真宗本廟(東本願寺)

第3節 釈尊と浄土真宗の祖師

(1) 浄土三部経について

私たち真宗^{おおたには}大谷派^{しやうえ}の正依の經典(その依りどころとする經典)は、『仏説^{ぶつせつ}無量寿經』、『仏説觀無量寿經』、『仏説阿弥陀經』の「浄土三部經」です。この3つの經典を選びとられたのは、親鸞聖人が「よきひと」とあおがれた法然上人です。法然上人は、その主著^{しゅちやう}『選択本願念仏集』^{せんじやくほんがんねんぶつしゆ}に、

まさしく浄土往生を明かすの教というは、三經一論これなり。

『選択本願念仏集』 (『真宗聖教全書』巻1 p931)

と、この3つの經典を示されています。

この三部經は、文字通り「浄土」を表現したのですが、それぞれに独自の意義をもって私たちの往生浄土の願いに応える經典です。

『仏説無量寿經』は、すべてのものの救いを成就^{じやうじゆ}すべき真実の法を明らかにする經典です。この經典には、すべてのものを平等に救う法は阿弥陀の本願であり、その本願のこころを具体的にあらわすのが南無阿弥陀仏の名号であると説かれています。つまり、この經典は、法の真実をあらわしています。

『仏説觀無量寿經』は、すべてのものを平等に救う本願の名号によって、まさに救われるべき人間をうきぼりにした經典です。そこに説かれている王舎城^{おうしゃじやう}の悲劇^{ひげき}の中で、苦悩する凡夫^{ぼんぶ}の身をさらけだした韋提希^{いだいけ}は、阿弥陀の本願に目覚めなくては生きることも死ぬこともできない人間そのものとしてあらわされています。つまり、阿弥陀の本願の名号によって救われるものとは、苦悩する凡夫そのものであることを明らかにしているのです。この經典は、この身の事実をあらわしています。

『仏説阿弥陀經』は、阿弥陀仏とその浄土の姿を説き、浄土に生まれる道として、ただ念仏の信をすすめ、この念仏の信心が、十方のたくさ

んの仏さまにほめられ、また護られていることを説いています。つまり、この經典は、苦悩するもの(衆生・人間一機)に本願のころ(法)があらわれる相^{すがた}を説いたものです。

親鸞聖人は、

三經^{さんぎょう}の真実^{しんじつ}は選択^{せんじやく}本願^{ほんがん}を宗とするなり。

『教行信証』(『真宗聖典 第二版』p396)

と、この三經を一貫しているものは阿弥陀如来の選択本願の念仏であるとおさえられ、そしてその「本願の名号」南無阿弥陀仏がとかれている『仏説無量寿經』を、

『大無量寿經』^{だいむりやうじゆきやう}真実^{しんじつ}の教^{きやう}
浄土真宗^{じやうどしんしゆう}

『教行信証』(『真宗聖典 第二版』p161)

と教え示しておられます。

私たちの正依の經典は、このようにしてお釈迦さまから七高僧、そして親鸞聖人へと連綿^{れんめん}と伝統されてきた教えの中で選びとられ、いまこの私にまで伝えていただいたものです。



「教行信証」(坂東本・東本願寺蔵)

(2) 釈尊しやくそんと七高僧しちこうそう

釈しやく 尊そん

釈尊(紀元前466～386とも566～486ともいわれる)は、インドのカピラ城じょうぼんおうに浄飯王を父とし、摩耶夫人まやを母として生まれられました。幼名を悉達多太子しつだるたたいしといます。青年時代のできごととして「四門出遊しもんしゅつゆう」という話が伝えられています。

太子は、城の東門を出たときに老人に、南門を出たときに病人に、西門を出たときに死者を送る葬列に出会い、そこに「生・老・病・死」という人生の苦悩を感じます。そして、北門を出たときに静かに歩いている出家者に出遇われ、自分の生きていく方向を感じとられたのです。

そして、29歳のとき、城を出て5人の友とともに山に入って6年の苦行の生活をされました。しかし、その苦行では人生の苦悩は解決できないことを知り、ひとり山を下りてブダガヤの菩提樹ぼだいじゅの下に座って瞑想めいそうをかさねられ、その49日目の暁あけつきに人生の苦悩を解決する法(道理)にめざめられたのです。ときに35歳、これを釈尊の「成道じょうどう」といます。

釈尊は、成道されましたが、その法をひとに説くこともなく、しばらくそのよろこびにひたっておられました。しかし、梵天ぼんてん(インドの神)の強い要請により、まずともに修行した5人の友のいる鹿野苑ろくやえんをたずね説法をされました。これを「初転法輪しよてんぽうりん」といい、人類の歴史の上で真に救われる教えが説かれた最初の尊いできごとです。その後、釈尊はずっと説法の旅を続けられ、舎利弗しゃりほつ・目連もくれんなども弟子たちとともに帰依してその教団は大きなものとなっていったのです。

しかし、クシナガラ城へ説法にむかう途中に病が重くなり、その城外

の沙羅樹さらかじゆの下に身をよこたえ、「自らみづかに依りて、他に依ることなかれ、法に依りて、他に依ることなかれ、自らをよりどころとし、法をよりどころとせよ」と説きのこされ、80年の生涯をおえられたと伝えられています。

親鸞聖人が、

如来にょらい、世よに興出したまう所以ゆゑは、唯ただ弥陀みだ本願ほんがん海かいを説かんと。
（『真宗聖典 第二版』p227）

と「正信偈しょうしんげ」にうたわれていますように、釈尊の生涯をつらぬいたものは、阿弥陀如来の本願の教えです。

七高僧しちこうそう

親鸞聖人が仏教の学びのなかで課題にされてきたことは、私たち人間が人間として生まれた意義にめざめ、人間として生ききることであつたといつてもいいのではないのでしょうか。そのことをわれわれに開く源泉を親鸞聖人は本願の名号にみさだめられたのです。そして、その本願の名号を明らかにするものを真実の教え、仏教の要かなめとうけとめられました。

釈尊の教えをこの一点にたつてうけとめ、そして本願の名号に出遇い、その教えを明らかにされた七人の方々（七高僧）を、親鸞聖人は浄土真宗の祖師そしとして選ばれました。それは言葉をかえていうならば、本願の教えに出遇われた親鸞聖人が、その感動のうちに、その教えを明らかにしてくださり、自身にまで伝統してくださった代表的な七人の方々に出遇ったということでありましょう。

親鸞聖人はこの七人の方々によって本願念仏の教え、お念仏に出遇うことができた、「正信偈」のなかに、それぞれ「龍樹」「天親」「曇鸞」

「道綽」「善導」「源信」「源空 (法然)」と名前をあげて、そのお仕事の徳を讃えておられます。

お寺の本堂内陣にも、親鸞聖人が「和国の教主」、つまり釈尊の教えをこの日本にはじめて教えひらいていただいた方とおのがれた聖徳太子の御影とともに、この七高僧の御影がかけられています。

龍樹菩薩

龍樹菩薩は2世紀後半南インドに生まれ、釈尊の教えを、全てのものの救いを明らかにする教え(大乘)として確かめられ、それを阿弥陀の本願の教えによってあきらかにしようと生きぬかれた方です。具体的には、「正信偈」に、

難行の陸路、苦しきことを顕示して、

易行の水道、楽しきことを信樂せしむ。(『真宗聖典 第二版』p229)

とあるように、私たちの救われる道を、自力で修行する道(難行道)としてではなく本願に帰する道(易行道)として示してくださっています。

また、その本願を信ずる身となったとき、どのような生き方のなかにあっても、もはや決して迷わないという「現生不退」ということを明らかにされています。

たくさんの著書がありますが、代表的なものに『十住毘婆沙論』があります。

てん じん ぼ さつ 天 親 菩 薩

天親菩薩は北インドに5世紀前後に生まれた方で、世親菩薩とも申しあげます。苦悩の多い私たち人間は一心に阿弥陀の本願を信ずる以外に救われる道はないと説いておられます。そしてその一心帰命の信心のうえにひらかれてくる広大な世界を、『浄土論』という書物をもって明らかにされています。

親鸞聖人はそのことを、

ひろ ほんがんりき えこう よ ぐんじょう ど ため いっしん あらわ
広く本願力の向に由りて、群生を度せんが為に、一心を彰す。

(『真宗聖典 第二版』p230)

と「正信偈」にうたわれております。

どん らん だい し 曇 鸞 大 師

曇鸞大師(476～542) は中国で生まれた方です。龍樹菩薩・天親菩薩の教えをうけとめて、ことに天親菩薩が『浄土論』を著された本当のおこころを『浄土論註』を著して明らかにされました。天親菩薩のしめされた信心は、私たちが何かを信じるといような立場からはうまれてこないことを明らかにしてくださっています。

おう けん えこう たりき よ しょうじょう ただしんじん
往環の回向は他力に由る。正定の因は唯信心なり。

(『真宗聖典 第二版』p231)

と「正信偈」にうたわれていますように、自力では真実の世界に生まれることはできず、他力によらなければ私たちに真実の信心はうまれないことを教えられています。

道 綽 禪 師

道綽禪師(562～645)は戦乱で人々の心は乱れ、仏教の教えが圧迫されていた時代の中国でお生まれになりました。本当の仏法に出遇うことを、ひたすら求められ、曇鸞大師の徳を讃え伝える石碑をごらんになって、浄土の教えに帰されました。

道綽、聖道の証し難きことを決して、ただ浄土の通入すべきことを明かす。 (『真宗聖典 第二版』p231)

と「正信偈」でうたわれていますように、釈尊が亡くなられてはるかな時をへだてた今日では、私たちの力ではどれだけの論理をのべ、修行をしても救われがたく(聖道門)、われわれ凡夫は、いま、そのことにめざめて阿弥陀の本願の教え(浄土門)に生きること以外に救われる道はないと『安楽集』を著して示されています。

善 導 大 師

中国にお生まれになった善導大師(613～681)は、道綽禪師に念仏の教えを学ばれました。

「正信偈」に、

善導、独り仏の正意を明らかなり。定散と逆惡とを矜哀して、光明名号、因縁を顕す。 (『真宗聖典 第二版』p231)

と親鸞聖人がうたわれていますように、阿弥陀の本願の教えによって自らが救われようのない身であることにめざめ、このような凡夫を救おうとするものこそ阿弥陀の本願であり、そのことを明らかにするのが仏教

であるとお教えになっています。

ことに『仏説観無量寿經』に説かれている王舎城おうしゃじょうの物語、そこに登場する韋提希夫人いだいけぶにんの本願との出遇いをとおして、私たち人間の罪惡の自覺と、その人間は阿弥陀の本願に出遇わなければ救われないことの大切さを、『観經疏かんぎょうしよ』を著して教えられています。

源 信 僧 都

源信僧都(942～1017)は、比叡山よかわの横川で、ひたすら仏教の学問をされていました。しかし、単なる学問では、自分、そして世の人の救いは明らかにならず、かえって迷わすものでしかないと気づき、阿弥陀の本願に帰依し、その救いを求められたのです。

「正信偈」で親鸞聖人が、
源信げんしん、広ひろく一代いちだいの教きょうを開ひらきて、偏ひとえに安養あんにように帰きして、一切いっさいを勧すすむ。

(『真宗聖典 第二版』p232)

とうたわれ、また、

極重ごくじゅうの悪人あくにんは、唯仏ただぶつを称しょうすべし。 (『真宗聖典 第二版』p232)

とうたっておられるように、私たちには、南無阿弥陀仏の念仏によってしか救われる道のないことを『往生要集おうじょうようしゅう』を著して教えられています。

源 空 (法 然) 上 人

法然上人(1133～1212)も、はじめは比叡山で天台宗の学問修行をさ

れていました。しかし、その学問修行に真実の救いを見いだすことはできませんでした。そのような中で法然上人は善導大師のお教えに出会い、山をおりて京都東山の吉水というところに居をかまえて、多くの人びとともに阿弥陀の本願の教えを聞き、私たち凡夫は阿弥陀の本願によってしか救われないことを説きひろめられました。

しんしゅう きょうしょう へんしゅう こう
真宗の教証、片州に興ず。せんじやくほんがん あくせ ひろ
選択本願 惡世に弘む。

(『真宗聖典 第二版』 p232)

と親鸞聖人が「正信偈」でうたわれておられるように、浄土真宗の教え、凡夫が阿弥陀の本願によって救われる、これこそが仏教であると、日本において高らかに宣言されたのです。その主著は『せんじやくほんがんねんぶつしゅう選択本願念仏集』です。親鸞聖人はこの法然上人に出遇われ本願念仏の教えに帰されたのです。

真宗宗歌

真宗各派協和会 作詞
島崎 赤太郎 作曲

1. ふとう かきのの みやう のみち りよと あすへ いくだ - まわて つれな るしく みみみ

2. どう かき の なにに - ににの たくと とら - - ぶと - ベベさ ききを ひろわ

3. どう かき の なにに - ににの たくと とら - - ぶと - ベベさ ききを ひろわ

たぐが すじは みみか ちなら ををに きとつ きなた ひへえ らつつ きつつ まよみ

このく とにの りのの みわた むいび - - - ねにを いいと たそも - - - だしに - - - かませ - - - んん

真宗宗歌

- 一、ふかき^{のり}み法に あいまつる
身の幸^{ちか}な^きに たとうべき
ひたすら道を 聞きひらき
まことのみむね いただかん
- 二、とわの闇より 救われし
身の幸^{ちか}な^きに くらぶべき
六字のみ名を となえつつ
世のなりわいに いそしまん
- 三、海^{うみ}の内外^{うちと}の へだてなく
みおやの徳の とうとさを
わがはらからに 伝えつつ
みくにの旅を とともにせん

恩徳讃 II

正像末和讃より
沢 康雄 作曲

♩ = 63

によ ら い だ い ひ の お ん ど く は
(如) (来) (大) (悲) (恩) (徳)

み を こ に し て も ほう ず べ し
(身) (粉) (報)

し しゅ ち し き の お ん ど く も
(師) (主) (知) (識) (恩) (徳)

ほ ね を く だ きて も しゃ - す べ し
(骨) (謝)

によ らい だい ひ おん どく
如来大悲の恩徳は
み こ ほう
身を粉にしても報ずべし
し しゅ ち し き おん どく
師主知識の恩徳も
ほねをくだきてもしゃ - す べ し
(骨) (謝)

食前・食後のことば

食前のことば

^{ひかり}
み光のもと

^{いま}われ今 ^{さいわい}に ^{きよ} ^{しよく}この淨き食をうく

いただきます

食後のことば

^{いま} ^{きよ} ^{しよく} ^{おわ}
われ今 この淨き食を終りて

^{こころ}心ゆたかに ^{ちからみ}力身にみつ

ごちそうさま



本山の御齋

